



第379号
「がんばろう、日本！」
国民協議会
機関紙

発行所「がんばろう、日本！」
 国民協議会
 発行人 戸田政康
 編集人 石津美知子
<http://www.ganbarou-nippon.ne.jp>
 (東京事務所)
 東京都千代田区九段北4-3-16
 サンライン第14ビル6階 〒102-0073
 TEL 03(5215)1330
 FAX 03(5215)1333
 (発行所)
 東京都東大和市南街2-17-16
 パピルス会館 〒207-0014
 TEL 042(566)2950(代)
 FAX 042(566)2949
 <郵便振替> 00160-9-77459

「政党政治が壊れていく」過程なのか、 「変化に対応するための『担い手の変更』」 の可能性があるのか

「世界第二の経済大国」幻想の最後の一片が吹き飛ばされた今こそ、「日本がどうなっており、どうなるか」を直視しよう

「太平洋の眠りを覚ます上喜撰、たった四杯で夜も眠れず」。ご存知、幕末、ペリー提督率いる「黒船」が浦賀沖に出現したときの狂歌である。銘茶の「上喜撰」を「蒸気船」に、「四杯」の「一杯」は船を数える単位にかけて、アジアの植民地獲得に乗り出す欧米列強が、いよいよ「鎖国・日本」にも迫ってきたことを指している。

「普天間の迷走に続いて」「蒸気船」ならぬ「酔いどれ漁船」の暴走から始まったこの秋の一連の外交的出来事は、まさに「世界第二の経済大国」幻想の最後の一片を吹き飛ばすに足るもの、のだといえるだろう。民主党政権の対応能力の欠如は目を覆うばかりである。自民党政権であれば、もう少しマシな対応はできたかもしれない。

しかし事態の背景にある構造要因は、「世界大戦に匹敵するような、国際秩序の大変動期」という歴史的激動である。この変

化に対応できない日本政治の機能不全は、自民党政権であっても本質は同じだ。これに対応するために試行錯誤してきたのなら、「失われた二十年」にはなっていないのだから。

「失われた二十年」とは「世界第二の経済大国」幻想の下での粉飾決算である。それがいよいよ行き詰ったからこそその政権交代である以上、政治の「見える」化は、負債の「見える」化から始まりざるを得ない。

「政権交代」というのは、前の政権がニッチもサッチもいけなくなつたから政権が変わるわけです。よその国は十二年くらいで政権交代をしますから、不良債権も負債もそれほど溜まっていけない。うちは半世紀ありませんでしたから、粉飾決算どころじゃないですね、負債の山です。破綻会社の管財人になってみたら、借金一兆円と言われていたのが、開けてみたら千兆円あった。埋蔵金を探したら、埋蔵借金まで出てきた。こういうことです。

中略〜国民の方も、まずそういう感覚を持たなければならぬ。民主主義での政権交代は、

ゼロを受け取るのではなく、マインス百を受け取るころから始まるんです。ある意味で破産管財人として始まるんですから。まず管財人としての能力があるかどうか。それが分かっているなら、逆走になる。それをまた言い訳していたら、ますます訳が分からなくなります。

『こんなはずではなかった』？ そうではない、これが事実なんです。『〇〇が悪い』『××が間違っている』って、この現状が打開できますか？ できません。また自民党政権に替えば、よくなりますか？ 内外の現状(国際秩序の大再編、右肩下がり)、そこから突きつけられている課題は、そんな次元で対応できることではありません。まずこの事実を、事実としてとらえることです(戸田代表を囲む会言葉部 十二画)

「世界第二の経済大国」幻想の最後の一片が吹き飛ばされた今、事実を事実として直視する(日本が(自分たちの社会)がどうなっており、どうなるか)か(どこから、ようやく)「変化に対応しなければならぬ」

という自覚が生まれる。そこから始めて、取り組むべき課題および優先順位が見え、課題解決プロセスとそれに必要な諸条件(決定的には人の要素)が見えてくる。このときにはじめて、「夜明け前が一番暗く」と言っている。

東アジア／リーダー総入れ替えの二〇二二年にむけて

中西寛・京都大学教授は、現在の国際秩序の大変動を「世界大戦に匹敵するような」ものだと指摘する。「現在の世界政治は権力政治レベルでの多極化と、経済システム・レベルでの金融主導のグローバル市場経済成長モデルの限界の露呈という二つのレベルでの大規模な変化が同時に進行しているところに特徴がある。中略〜歴史的に見れば、大國間秩序の大規模な再編成と世界的政治経済システムの変容が同時に起きるような変動は、主要国間の大規模な戦争を経て実現されることが一般的であった。中略〜しかし現代においては、世界規模の相互依存が浸透しているので、大國間

の戦
 とは
 なっ
 ステ
 を通
 あろ
 一マ
 した
 中略
 コレ
 編成
 ト」
 し主
 編成
 容と
 際シ
 と日
 究所
 一)
 二
 位は
 行し
 ては
 わる
 のこ
 不安
 時に
 の国
 「書
 れと
 かが
 (後
 プし
 ち)
 東東
 点で
 域に
 っせ
 中国
 台湾

1部 300円
半年2,000円
一年3,500円
定期購読

今号の紙面

2面	一灯照隅(地方議員のコラム)
インタビュー	
3-8面	平将明・衆院議員、 玉木雄一郎・衆院議員、 五十嵐文彦・財務副大臣
15-14面	本多平直・衆院議員
8-11面	囲碁会「内閣府副大臣として」 大家耕平・参院議員
11-14面	囲碁会「京都」 小川淳也・衆院議員 諸富徹京大教授

大国ではない。方向付けられた変化に対して、「いかに対応するか」という立ち位置である。同時に二十一世紀初頭の国際関係においては、超大国の行動の細部にいろいろな国がチョッカイを出し、軌道修正を図るソフトランシングという関わり方もある。

的な財政赤字を抱えつつ人口減・少子高齢化社会を凌ぐという課題が同時に課せられている。このかつてない多元連立方程式を解くには、右肩上がりの時代の経験は使えないものにならない(少しでも使えないものにならない)。「ゆでガエル」にはなっていない。i) シュンペーターはイノベーションを「非連続的な変化」と規定し、新結合は旧結合との断絶の上に現れなければならないとしている。それは「軌道の変更」について「担い手の変更」として進む。かつてない連立方程式(軌道の大変更)を解くためには、担い手の変更が不可欠なのだ。

もアメリカも大統領選である。このプロセスのなかで、米中を軸としつつ多極化した東アジア国際秩序の「次の枠組み」、およびそのなかでの各国の位置取りの目安が見えてくる。各国の内政も、そこにむけたせめぎあいと無縁ではない。多極化時代にあつて、地域秩序の再編成におけるリーダーシップも、これまでは違つものが求められる。砲撃をはじめとする北朝鮮の挑発行為も、こうした国際秩序の大再編に対するマイナスの側からの「参入」形態とみることが出来る。こうしたマイナスからの参入を、どうマネージするか、その帰趨は二十一世紀前半の東アジアの秩序形成を左右することに出来る。中口を「責任ある大国」へと導きつつ、多極化した世界をマネージできるか。それとも「新冷戦」という形でふたたびアジアが引き裂かれるのか。

リーダーシップには、人の要素が決定的である。言い換えれば「担い手の変更」とは、求められている資質を明確にし、そこから「人」を選抜していくということである。これは「世代交代」というようなあいまいなものではない。

「膨張する中国」が「暴走する中国」になるのか、それとも「責任ある大国」となるのか。これも軍、国有企業、地方政府、熱狂する大衆といった国内のさまざまな利権集団をいかにマネージできるか、に大きくかかっている。アメリカの対中戦略も「パワーシフト」をにらみつつ、経済の相互依存というパラダイムシフトを視野に入れたものになつていくが、中間選挙で大敗したオバマ政権がアジア外交にどこまで本格的に力を割けるか、という問題もある。

冷戦時代なら、外交は両陣営のボス交に任せておけばよかった。「西側の一員」「世界第二の経済大国」の「お札」さえあれば、あとは「気配り」「カネ配り」という、分配政治の延長でいられた。しかし冷戦が崩壊し、グローバル経済が進展するなかで「友好国」「同盟国」の意味もシビアに変わる。多極化する世界では外交は「ボス交」ではなく、常に連立方程式で動くことを思い知らされる。G7は着席形式だが、G20は立食形式だ。着席形式なら案内された席につけばよいが、立食形式では、全体の諸関係をみながら立ち位置を決め、なおかつ自力でそのポジション取りをしなければならぬ。

東アジアでは、中国の台頭に見られるような「パワーシフト」と、G20に象徴されるような「パラダイムシフト」が同時進行している。さらにわが国には、右肩上がりから右肩下がりへの逆回転の開始とともに、天文学

(余談になるが、韓国はG20の開催国として一年あまりにわたる

の戦争が起きる可能性は不可能とは言えないまでも極めて低くなった。中略く現在の世界システムの変動は経済メカニズムを通じて起きる度合いが高いであろう。二〇〇八年九月の「リーマン・ショック」を引き起こしたアメリカの金融危機は、中略く危機への対心力という「テスト」を通じて国際秩序の再編成を促している。この「テスト」は、世界において大国ないし主要国と見なされる国家の再編成と、世界の諸問題に対応するガバナンス・メカニズムの変容という二つの経路を通じて国際システムの変化を促している。「グローバル多極秩序への移行」と「日本外交の課題」経済産業研究所 ディスカッションペーパー「」

16面へ続く

替えの
言いつ
め、
が見
な諸条
な課題
き課題
そこか
は、現
「世界
ものだ
政治は
金融
成長
二つ二
に特徴
に見れ
な再編
の金融
な戦争
一般的
し現代
相互依
大國間

東アジアはこうした変動の焦点であり、二〇一二年はこの地域に関わる諸国でリーダーがいっせいに交代することになる。中国では胡锦涛体制が代わり、台湾では総統選、ロシアも韓国

二度の大战を経て覇権国の地位はイギリスからアメリカへ移行したが、今回の大再編においてはそう簡単に、アメリカに替わる超大国は見当たらない。そのことがこの再編期の複雑さ、不安定さを増大させている。同時に台頭しつつある中国が、この国際秩序の大再編のなかで「責任ある大国」となるのか、それとも混乱・攪乱要因となるのか、大きなポイントである(後者の要因をいかに修正、セーブしていくかというアプローチ)。

参加の輪をさらに

この後の質疑応答では、このままの状況が続けば、毎年財政赤字が一五〇億円〜二〇〇億円続くという川崎市の置かれている現状を共有した上で、どうしたらいいのかということについてさまざまな観点から質問・意見が出されました。

「必要でないサービスがあると思います。削るべきではないでしょうか」「産業活性化で税収増をはかるべきではないかと思えます。川崎は環境技術が優れているので、他の国にそれをアピールできないかと努力しているところですか」「税収が厳しい中で議員自ら身を削るべきではないでしょうか」「市民と議会の緊張関係を作っていくためにはもっと情報を公開すべきだと思います」「事業仕分けを行うべきだと思いますが、川崎市で行う予定はあるのでしょうか」「市民が市政を身近なものとして感じるためにも、区の権限を強化すべきだと思います」等々の質問・意見が出されました。

ひとつひとつの意見に対して堀添市議から「いいいな応答がありました。また参加者の中から、このよきな集まりを自分の住んでいる地域でもやりたいです」という意見が出されました。最後に実行委員会から、「パブリックコメント」への参加要請と次の実行委員会への参加を呼びかけて終了しました。今回、幅広い層からの参加で、当事者意識をもった論議ができてよかったと思います。今後はもっと論議を市民の間で回していくこと、そしてそこに私達が意識的に関わっていきけるようにしていきたいと思えます。もっと多くの方が参加してくれるよう今後も努力していきたいと考えています。

一面から続く

準備を通じて、G20経済外交とG20マーケティングの経験を集積したという。一年間のAPEIC開催準備で、わがほうは何をどれだけ学び、集積したのか。

また右肩上がりの時代なら、年々税収が増えるから、予算編成は「あれも、これも」ですんでいた。しかし右肩下がりになり、生産年齢人口が急速に減る一方で、高齢化によって社会保障費が毎年一兆円「自然増」になる、という時代には、そのままだでも何かを削らなければ社会保障費の自然増すら賄えない。借金にもそろそろ限界が見えてくる。

まさに「あれか、これか」「何かをやるためには、何かをあきらめる」というリーダーシップが、予算編成に求められている。しかし二十二年度予算は、自民党政権の概算要求にマニフェスト項目を上乘せした結果、膨らんだ歳出を過去最高の国債発行で賄うというザマとなった。二

十三年度予算編成においても、財源探しの苦労は見えても、わずかにあったマニフェストの政策思想の軸（控除から給付へなど）は、風前の灯である。

政策思想の軸が分かる側からは、どういうリーダーシップが致命的に必要なのか（リーダーの選抜の基準）が、ここから鮮明になってくる。

「何かをやるためには、何かをあきらめる」というリーダーシップは、地方自治体においては形づくられ始めている。三代市長を誕生させた構造は、「自分たちのまちがどうなっており、どうなりうるか」を共有する市民と首長による、ローカルマニフェストの作成・検証に入りつつある。こうした市民と向き合いながら決定機関としての責務を担う議会にむけた、議会改革も始まっている。

リーダーの選抜の基準、バッジをつけた主催者の選抜の基準を、ここから鮮明に絞り込んでいくことは、来年の統一地方選

の課題でもある。そのためにはまず「自分たちのまちがどうなっており、どうなりうるのか」、事実を事実として共有することが不可欠となる。

また政権交代によって、わが国でははじめて政権担当の経験がある野党が誕生した。自民党は参議院ではじめて会長を選挙で選び、派閥支配に代わって党としてのマネジメントを機能させつつある。政権担当を前提としない野党と、政権運営の経験に立つ野党では、政権に対する批判、検証は当然変わってくるはずだ。ここから本来の意味での健全野党、政権交代を前提とした野党第一党のあり方も見えてくる。

私たちが向き合っているのは「政党政治が壊れていく」過程なのか、それとも「変化に対応するための“担い手の変更”を押し進める主催者運動」か。

□日程のお知らせ□

- ◆「日本再生」読者会 12月5日（日）午前10時より 「がんばろう、日本！」国民協議会事務所
- ◆北九州「日本再生」読者会（会費 500円） 12月21日（火）午後6時30分より 小倉商工会館
- ◆大阪「日本再生」読者会（会費 800円） 12月10日（金）午後7時より 大阪研修センター・十三
- ◆京都・青年学生読者会（会費 無料） 12月11日（土）午後7時より 同志社大学寒梅館

***** 以下は事前のお申し込みが必要です *****

□第94回 東京・戸田代表を囲む会
『『経済学っぽい』思考の欠如が、日本をダメにする？』
12月20日（月）午後6時30分より ゲストスピーカー 諸富徹・京都大学教授
「がんばろう、日本！」国民協議会 事務所（市ヶ谷）
会費 同人2000円 購読会員3000円（いずれもお弁当付）

□2010年望年会 in 東京 12月23日（木・祝）午後4時より
「がんばろう、日本！」国民協議会 事務所（市ヶ谷） 会費 2000円

□2010年望年会 in 京都 12月21日（火）コープイン京都
午後6時より 第一部 講演 村田晃嗣・同志社大学教授 会費1000円
「リーダー総入れ替えの2012年・東アジアをどう展望するか」
午後7時より 第二部 懇親会 会費3500円

■問い合わせ 03-5215-1330